

## 藤琴豊作踊り

藤琴豊作踊りは、過去 400 年間にわたって毎年 9 月に藤里の町で行われている。主な踊りである駒踊りは、武将であった佐竹義宣（1570～1633 年）の傷ついた自尊心を慰めるために演じられたのが始まりであった。義宣は、名門豪族であった佐竹家の長として、かつて大國であった常盤国の領主（現在の茨城県）だった。しかし、1600 年の関ヶ原の戦いで徳川家康（1543～1616 年）と戦い、家康が戦いに勝利すると、権力の中心から遠く離れたより小さな領地の久保田藩（現在の秋田県）への転封を義宣に命じた。久保田藩への道中、義宣の家臣らは踊りを演じて義宣の士気を鼓舞しようとした。その踊りが、後に藤琴豊作踊りとなったのである。

現代の踊りの演出では、駒踊りの踊り手は、決められた振り付けで戦いの様子を表現する。町の 20 人以上の人々が、武士の甲冑のように見える手の込んだ衣装を身に着ける。腰の周りにはベルトのような仕掛けがついており、まるで馬に乗っているかのように見える。肩には、ハネまたはソデと呼ばれる巨大な肩板がついている。踊り手が舞を演じる時、ハネを自分の顔の方向に跳ねさせる。非常に激しく舞う踊り手もあり、一日の終わりには耳や頬に切り傷を負う者もいる。このため、藤里町の踊りは、秋田で最も激しい駒踊りの一つとして認められている。

最初の駒踊りに続いて獅子踊りが演じられる。これは、獅子と呼ばれる様式化されたライオンの格好をした 3 名の踊り手によって演じられる。獅子は伝説上の守護ライオンであり、日本の宗教的な祭りでの獅子舞は恒例である。藤里で行われる踊りは、恋の三角関係を表現している。雄ライオン（青を着用）と雌ライオン（赤を着用）が一緒に旅しているところに、黒いライオンが突然現れる。黒ライオンは、雌ライオンをパートナーから奪い去り、青ライオンは雌ライオンを探しに行く。青ライオンは黒ライオンと戦い、赤ライオンは元のパートナーのところに帰り幸せになる。一人の踊り手がそれぞれの獅子を操り、口と頭を動かし、ゆったりとした布の衣装の中で体を踊らせる。獅子の踊り手による演目が終了した後、駒踊りの踊り手が再び祭りの中心的な踊りに戻る。

踊り手には太鼓奏者と笛奏者が同行し、踊りが表現している戦場を想像させる音楽を演奏する。踊り手たちは一日中町を踊り歩き、最後に浅間神社で演舞を行う。